《書　評》

小野泰教
『清末中国の士大夫像の形成——郭嵩燾の模索と実践——』
（東京大学出版会、2018 年）

苗　　　　婧

本書は清国初代駐英公使を務めたことで知られる儒教的知識人郭嵩燾（1818-1891）の思想や実践に対する研究成果である。著者は従来の研究に描かれた二つの郭嵩燾像を批判的に検討した上で、新たな郭嵩燾像の提示を試みた。従来の郭嵩燾像とは、一つは郭嵩燾が西洋の軍事技術に関心を示しただけでなく、西洋の経済・政治・社会・文化等多様な面を高く評価したことを捉えて、彼を「西洋社会の進歩性に気づいた開明的知識人」（２頁）として位置付けたものである。またもう一つは郭嵩燾の伝統的な士大夫という側面に注目し、彼を「西洋に儒家的価値観で臨んだ伝統士大夫」（３頁）として扱ったものである。著者によれば、この二つの郭嵩燾像に潜んだ問題性とは「進歩と保守、あるいは西洋近代と伝統儒学といった中国近代思想史研究の枠組みに関連させる形で郭嵩燾を分析しようとする」（４頁）ことだという。著者がその中国近代思想史研究の枠組みと距離を置き、あくまでも郭嵩燾自身に即して郭嵩燾像を探った結果、郭嵩燾の主体的な問題意識は「士大夫像の模索、すなわち士大夫とは社会においていかにあるべきかという問題をめぐる思索」（４頁）にあることを明らかにした。かかる本書の特徴は、「従来の研究が重視してきた郭嵩燾の西洋認識や儒学を、彼が士大夫像の模索を行ううえでの一つの方法」（14 頁）にし、「西洋であろうが、儒学であろうが、士大夫像の模索に有用なものであれば積極的に利用していった」（14 頁）という郭嵩燾像を提示したというところにある。

以上の課題設定を序章で明らかにしたうえで、著者は郭嵩燾の地方官経験、西洋体験と経学・諸子学研究という三つの場面を取り上げ、郭の士大夫像の模索を考察した。本書はこの三つの場面に対応する三部・八章、そして序章と終章を加えて以下のように構成されている。

序章　郭嵩燾による士大夫像の模索

第Ⅰ部　士大夫の社会的地位の回復を目指して

　第一章　士大夫の商賈化への批判

　第二章　士大夫どうしの関係悪化への危機感

第Ⅱ部　士大夫像の模索と西洋政治像
　第三章　渡英直前の郭嵩燾と劉錫鴻の士大夫像
　第四章　郭嵩燾・劉錫鴻の士大夫像とイギリス政治像
　第五章　イギリス政治像と士大夫批判
第Ⅲ部　士大夫像の模索と経学・諸子学
　第六章　民を治める方法の模索――『大学』『中庸』解釈
　第七章　礼の実践――郭嵩燾の宗法論
　第八章　「是非の辯を押し付けること」と「己を俗と同じくすること」の克服
　　　　　――『荘子』解釈
終章　清末中国の士大夫像の形成とその意義

まず第Ⅰ部では、郭嵩燾が幕友や地方官経験を通じて、士大夫と商賈のあるべき関係、及び士大夫同士のあるべき関係という二つの側面から士大夫像を模索していたことが検討された。

第一章では、郭嵩燾による「士大夫の商賈化」批判が考察された。それは彼の徴税官経験に深く関わっているという。この時期に、郭は「士大夫と商賈とを厳格に区別し、商賈のうえに立って社会秩序の安定に寄与する士大夫という観念を形成していった」（44 頁）。郭は自らの徴税経験から、士大夫は自らの徳性によって郷紳や商賈の信頼を勝ち取ることで軍費を捻出させなければならないと主張した。そして、それはやがて、郭の西洋の「官」への着目につながった。

第二章では、釐金事業や外交交渉を考察していく中で、郭嵩燾は士大夫どうしの関係が秩序に影響を与えるものとして考えていた。士大夫どうしの関係悪化に危機感を覚えた郭は、「真の士大夫を選び出し、彼らと良好な関係を築きながら、ともに皇帝の意向を体現する」（63 頁）ことを追求したという。

次に第Ⅱ部では、西洋体験をした郭嵩燾の士大夫像の模索を彼の西洋政治像と関連づけながら検討し、彼が模索した二つの士大夫像が提示された。すなわち一つは、他の社会階層を統括すべき士大夫像であり、もう一つは、士大夫同士で良好な関係を築き、良き風俗を形成できる士大夫像である。また、士大夫像の模索という課題を郭と共有しながらも、完全に異なる模索を行った駐英副使だった劉錫鴻との比較も行っている。

まず、第三章では、郭嵩燾と劉錫鴻との士大夫像の比較がなされた。従来、二人は進歩派と保守派として捉えられることが多かったのに対して、著者は、二人の間の根本的な相違は異なる西洋政治像の相違だと主張する。同治年間の同文館論争や海防籌議など洋務人材をめぐる議論において、「郭嵩燾は終始洋務人材を的確に管理活用できる士大夫を理想とした」（90 頁）という。彼は士大夫とその他の階層という構図を西洋社会にも見出した。すなわち、郭における西洋政治像とは、朝廷と商賈が理想的な分業を行い、「商人をうま

く扱う朝廷の存在する国家」（91頁）であった一方、劉錫鴻における西洋政治像とは、商賈による商賈のための政治であり、「商人が全員で商業的利益をはかる国家」（91頁）であった。

つぎの第四章では、それぞれの西洋政治像を持っていた郭嵩燾と劉錫鴻が渡英した後、異なるイギリス政治観を展開したことが検討された。一方では、郭嵩燾はイギリスの議会やアソシエーションに対する観察を通して、官の圧倒的な力、官同士や紳同士の良好な関係性、及び民に対する上からの教化に注目し、特に多様な官や紳の集団が「一つの価値に向かっている」（126頁）ことに惹かれた。その理由は、「西洋では、自らと異なる者をも許容し自らの相手と見なすことで、かえって合意が生み出され」、「中国では逆に一元化を目指すことが無数の党争」（126頁）が生み出されたと郭が考えたからだという。他方では、劉錫鴻は西洋における民の強さ、民と官との対等性に着目した。そのため、劉が問題視したのは「中国が逆に、民が民として力を持てず、常に官にすり寄る形になってしまう弊害であった」（126頁）ということであった。換言すれば、劉錫鴻は西洋と中国との異質性を明確に認識したのに対して、郭嵩燾は終始、士大夫的なものをイギリスに見出そうとしたのである。

第五章では、郭嵩燾と劉錫鴻のイギリス体験後の士大夫批判の比較が行われた。郭は人心風俗の改良、即ち「『士』を優位とした『士農工商』の分業体制の重要性を各社会層に理解させる」（148頁）ことを主張し、また、「士」同士が良好な関係を築くことの重要性を唱えた。一方、劉錫鴻は「『士農工商』がはっきりと分かたれ、『士』がそれを統率するという発想自体が、士のむやみな増加を生み、秩序を乱す」（148頁）と考えていた。劉の議論は中国の政治主体のあり方を完全に否定することになるが、著者は、それは「郭嵩燾の盲点を最も鋭く突くもの」（148頁）だったと評価した。

第Ⅲ部では、郭嵩燾の経学や諸子学から読み取れる秩序観、及びそれに関わる士大夫像が提示された。

まず第六章では、郭嵩燾が自著『大学章句質疑』と『中庸章句質疑』において、「為政者が民をどのように統治すべきか」について朱熹の解釈を批判的に検証していたことが考察された。著者によれば、「朱熹が、為政者と民との間に共有される理を見出し、民自身にも自発性や発展性を認めたのに対し、郭嵩燾は民とは断絶している為政者がどのように民に有効な統治をおよぼせるかという観点」（170頁）を持っていた。つまり、郭嵩燾は、被治者である民が為政者の教化を理解し自己発展する可能性を否定し、為政者が「誠」や「礼」によって、それぞれ好悪を持っている民を統治し、天下を一つの好悪にしてしまうと主張していたという。

次の第七章では、郭嵩燾の礼学研究と宗族運営との関係が明らかにされた。著者によれば、郭にとって宗族の運営に関わる二つの士大夫のあり方とは、一つは「宗祀の祭祀を担うべき高位高官であり、かつ一族から公を体現する者と認められる存在」（185頁）であ

り、もう一つは「他族の士大夫にまで影響を与え、ひいては国家全体の秩序につながっていく」（185 頁）ような規律ある宗族運営を担える存在である。

さらに第八章では、郭嵩燾は『荘子』郭象注における是非の対立のない世界像を批判し、「彼是間には是非の争いが存在することを認めたうえで、極力その是非の争いを軽減させる」（200 頁）という関係に注目していたという。著者によれば、郭における秩序観とは「自らとは異なる他者の存在を認めたうえで、常に向かい合おうとすること、たとえその間に是非の相違があろうとも終始相手として向かい合うことである。そのような向かい合いが成立していることこそが一つの秩序」（200 頁）である。常に他者に向かい合うことこそが聖人の資質であり、士大夫に求められることだという。

この第Ⅲ部の議論を通して、郭嵩燾の秩序観と士大夫像はこのようにまとめられている。即ち、「彼の秩序観とは、この世界がさまざまな事物の自己主張からできているというもの」であり、彼の「士大夫像の模索は、世界がそのようなものであると認めるところから始まっていたのである。このような認識があってこそ、あらゆる事物が最終的には一つの価値観に収斂していくという郭の秩序像が生まれた」（200 頁）というものである。また郭は、自己主張のぶつかり合いと互いの滅ぼし合いという士大夫同士の議論の弊害を経験したからこそ、「世界が一つの価値であるべきだ」と最初から確信した。そのため、彼にとってあるべき士大夫とは、「自己主張の入り乱れる世界を認めたうえで、それぞれの自己主張の間で極力共有できる点を見つけようとする努力をいとわない（中略）存在だった」（200-201 頁）という。

最後に終章では、本書の総括、及び清末中国における士大夫像の模索をめぐる多様な議論の空間の存在とそれが中国近代思想史に対する意義が述べられた。

以下、本書の意義を確認しながら、本書に対する筆者の感想を述べたい。まず本書の意義について、二点に分けて論じたい。

第一に、本書の最大の意義はやはり、新しい郭嵩燾像の提示にある。著者は従来の研究によって描かれた二つの郭嵩燾像――西洋社会の進歩性にいち早く認識した開明的な知識人としての郭嵩燾像と、儒家的価値観をもって西洋に臨んだ伝統士大夫としての郭嵩燾像――が抱える問題を克服した上で、第三の嵩燾像を確立した。

著者が論じたように、従来の多くの郭嵩燾研究は彼の西洋認識に注目した結果、「西洋」という基準をあらかじめ設定し、郭の思想がそれにどこまで接近することができたのかによって彼の進歩性と保守性を判断した。あるいは、逆に、前者の郭嵩燾像に帯びた西洋中心主義的な傾向を批判するために、郭の思想における強固な儒教思想の影響力を強調し、しかも、郭の思想における儒教的要素を内在的に分析することなく、ごく一般的に論じていた。その結果、前者は郭を「進歩的」人物として評価する一方で、後者は郭の進歩性を否定し、彼を伝統的＝儒教的な存在として捉えることになる。つまり、両者はともに「進歩と保守、あるいは西洋近代と伝統儒学といった中国近代思想史研究の枠組み」（４頁）

に縛られて、真の郭嵩燾に近づくことができなかったのである。

著者はまさに先行研究におけるこのような問題性を明確に意識し、郭嵩燾に即して郭嵩燾の主体的な問題意識を探ろうとして、郭自身の主体的な問題意識を彼の士大夫像の模索という点に求め、新たな郭嵩燾像を描き出すことに成功した。

「士大夫像の模索」という新しい視座の有効性は、具体的に、例えば本書で行われた郭嵩燾と劉錫鴻との比較からわかる。西洋政治観や士大夫像をめぐる二人の間の相違は、従来の進歩・保守の認識枠組みから見れば、矛盾を抱えることになる。たとえば、「開明的」な郭と「保守的」な劉とされた二人の西洋議会観を比較すると、「一貫して民とは区別された官や議員」に注目した郭は、議会を「為政者の信頼関係に満ちた集団」(117 頁)として重視したのに対して、劉はむしろ西洋社会の「官民の対等性」(106 頁)と民の強さに関心を持ち、率直に西洋の議会を評価した。つまり、従前の西洋中心の「進歩・保守」という枠組みで捉えれば、議会観に関しては、郭はむしろ保守的と呼ぶべきであり、逆に、劉はより開明的だったと言えることになるわけである。しかし、「士大夫像の模索」という儒教的知識人だった郭の主体的問題意識からすれば、上記の郭と劉の進歩性と保守性の弁別をめぐる矛盾はもはや問題にならず、より郭嵩燾自身に即した理解となるのである。

そして第二に、本書は郭嵩燾による士大夫像の模索を、儒教思想の文脈の中で朱子との比較を通して明らかにしたとともに、郭の思索を官僚、外交官、そして、郷紳としての彼の実践と結びつけながら論じて、様々な場面に現れていた郭の一貫した問題意識を描き出した。それは本書が提示した郭嵩燾像により説得力を持たせている。

以上述べたように、著者が郭嵩燾の士大夫像の模索を本書の核心に据えて説得的に論じたことは重要な意義を持つ。しかし、郭の思想を「士大夫像の模索」という論点で考察した結果、郭の思想の特徴を捉えづらくなった面もあるように思われる。以下、二点に分けて述べてみたい。

まず一つめとして、著者が新しい視座を提示した代償として、郭嵩燾の思想のダイナミックスが見えづらくなったように思われる。郭の思想のダイナミックスの看過について、以下の二点を指摘したい。

①これまでの研究と文脈が異なり、郭嵩燾と時代背景とのダイナミックスが見えづらくなるという点。

著者は「従来の研究が重視してきた郭嵩燾の西洋認識や儒学を、彼が士大夫像の模索を行ううえでの一つの方法であったと考え」、「彼は西洋であろうが、儒学であろうが、士大夫像の模索に有用なものであれば積極的に利用していった」(14 頁)と主張している。そのため、著者は士大夫像の模索を郭生涯の「目標」にし、西洋や儒学を彼の「方法」にし、議論を展開した。だが、西洋や儒学は、郭にとって、果たして単なる「方法」にとどまっていたのであろうか。

郭嵩燾は「西洋の衝撃」という未曽有の時代の中で、西洋に向き合わざるを得ない状況にあった。その中で、郭嵩燾は時代の変動に背を向けたり、あるいは受動的に受け入れたりしたのではなく、むしろ時代動向に非常に敏感で、積極的に向き合って、政治外交の第一線で活躍した。このような郭嵩燾と時代背景との間の緊張とダイナミックスは重要である。これまで数多くの研究が郭嵩燾と西洋を研究課題にしてきたのもまさにこのような緊張感を前提にしていたからだと思われる。

こうして、著者が示したように、郭の西洋認識を郭の士大夫像の模索の「方法」に重きを置いて捉えることで、たしかに先行研究が抱える問題性を克服することはできたが、そのために、著者の課題設定はこれまでの研究と文脈が異なり、郭の思想のダイナミックスが見えづらくなってしまった。

②著者の課題設定により、郭の思想的営為と外交的実践をいずれも「士大夫像の模索」というおよそ儒教知識人であればみな直面しなければならない不変の目標に還元したことは、郭の思想をよりダイナミックに捉えることの妨げになるという点。

一例をあげれば、郭嵩燾がアロー戦争に際して、主戦派士大夫の無謀な「攘夷」論を批判したのは、おそらく、郭の“士大夫どうしの関係性”という士大夫像の模索であった以上に、清国は西洋といったいどう交渉すべきかという切迫した課題に直面していたからだったと思われる。郭によれば、アロー戦争期に清国政府の政策決定が定見を持っておらず、絶えず主戦と講和の間で動揺している最も根本的な理由は、当時蔓延していた主戦的観念論にあった。その主戦的観念論に最も固執していたのは北京の士大夫集団であった。彼らは「攘夷」のスローガンを叫び、西洋諸国との講和を恥とし、主戦を先験的な至理とした[1]。もし清国が西洋の「情」をはかり、「理」をもって西洋と交渉すれば、外交問題をうまく解決することが十分に可能だったにもかかわらず、北京の士大夫の主戦的観念論により、清国は自ら状況を悪化させ、結局、自分を窮地に追い込んでしまったということを郭が何よりも憂慮していた[2]。

したがって、著者は、進歩－保守、西洋近代－伝統儒教という研究枠組みを前提にして郭嵩燾を分析しようとした従来の研究における問題性を明確に意識しており、それらのパラダイムを克服することに成功した一方、時代変動に敏感に反応した郭の特徴が見えにくくなっているように思われる。確かに郭嵩燾の思索を従来の研究枠組みで単純に当てはめることは不適切ではあるが、彼は「西洋の衝撃」にもたらされた大きな時代変動を敏感に察知し、積極的に反応したことは否めない事実である。その激動する時代に対する郭の反応、及びその反応を形成させる儒学的要素、あるいは西洋的要素を探ることも重要ではな

1　例えば、郭嵩燾、『郭嵩燾全集』（八）、岳麓書社、2012 年、357-358 頁（咸豊十年九月二十九日の件）、359 頁（咸豊十年十月四日の件）を参照されたい。

2　例えば、『郭嵩燾全集』（八）、419-422 頁（咸豊十一年七月二十日の件）を参照されたい。

いかと思われる。

　次に郭の思想の特徴を捉えづらくなった二つめの点についてである。本書は郭嵩燾による「士大夫像の模索」という全体的な研究課題によって貫かれ、著者は各章では多様な場面における士大夫を扱い、様々な側面から郭の士大夫像模索を考察して立体的に豊かな郭嵩燾像を提示した。その意味では、本書は郭の全体像に対する理解に欠かせない重要な研究である。その一方で、様々な場面で展開された郭嵩燾の士大夫像の間の相互関係については考察がやや不十分のように思われる。この点について、また二つのポイントによって説明してみたい。

　一つのポイントは多様な士大夫像の相互関係についてである。著者の説明によれば、「士大夫とは、儒家の経典である経書と詩文との教養を身につけ、科挙試験に合格して行政を担った学者官僚のこと」（３頁）であり、「その道徳的、文化的威光によって民を教化する存在」（３頁）であった。

　この一般的な定義を踏まえたうえで、著者は各章で郭嵩燾の士大夫の様々な具体像を提示した。例えば、第一章で提示されたのは商賈と結託して私利を貪ろうとする「言事者」（諫官）＝士大夫である（38 頁）。第二章における士大夫は、アロー戦争に際して主戦的な観念論を堅持する北京の士大夫（49-51 頁）、及び地方の「候補官・郷紳」（55 頁）を指しているであろう。第三章で検討された士大夫とは商賈に対しての「官」である（74-80頁）。第四章において、郭は士大夫像を西洋の市長などの官や議員に投影したという（104、115 頁など）。第五章で議論されたのは、「士農工商」の分業体制で優位を占める「士」である（147 頁）。第六章で取り扱われた士大夫は道徳性が求められる「君子」だと読み取れる。第七章で触れた士大夫は宗族運営を担うべき高位高官を指している（180 頁）。第八章で論じられた士大夫は、「聖人像」（190 頁）や「至人像」（196-197 頁）と関連付けられて説明されている。

　では、各章で提示された郭嵩燾の士大夫像の多様な様態の間にどのような内在的な関係を持つのであろうか。この点について、著者は十分に論じていないように思われる。例えば、官僚と郷紳とは同じ士大夫であるが、為政者としての官僚と在野の名望家との間にやはり違いがあるはずであろうし、また、士大夫が持つ政治権力と彼らに求められた道徳性とはどのように関係しているのであろうか。

　もう一つのポイントは、郭嵩燾の「士大夫像の模索」という課題のもとで、これと関連した他の論点も注目に値することである。一つの例をあげれば、郭嵩燾の士大夫論における士大夫と朝廷との関係についてである。第一章では、「士大夫の商賈化」を朝廷の利益誘導や任官資格の売買によってもたらされた結果として理解することができること（29-32 頁）、また第二章では、朝廷は士大夫の主戦的な議論に掌握されて、適切な外交判断ができないということ、が言及されている。ここでは、同じく為政者だが、士大夫と朝廷との関係に対する郭嵩燾の考えについて考察できたら、彼の思想の特質に対する理解がより

深まるのではないだろうか。もう一つの例をあげれば、郭嵩燾の士大夫論と「公」との関係についてである。例えば、郭嵩燾は釐金に言及した時に、それを「為公而実」（36-37頁）と高く評価した。また西洋を観察する場合も、西洋を「国政一公之臣民」（115頁）、「議論是非則一付之公論」（116頁）のように「公」をもって称賛した。さらに、宗族の運営を担うべき士大夫に対して、郭嵩燾が彼らに求めたのはやはり「公」であった（181頁）。その意味では、郭嵩燾の「公」に関する議論は、彼の士大夫像の模索との関係からしても、あるいは彼の思想を考察するキーワードとしても注目に値するように思われる。

以上、本書から多くのことを学んだ者として、本書の研究に触発されつつ、思うところを述べてきた。本書は中国近代思想史研究の枠組みではめられた従来の郭嵩燾像を批判的に検討したうえで、郭嵩燾自身に即し、郭嵩燾の生涯を貫いた主体的な問題意識を抽出し、緻密な論証を行った研究書である。著者は、郭嵩燾を含めた清末中国の知識人たちの思想世界を探求する時に、従来の研究枠組みと緊張感を保ちながら研究対象に即して検討することの重要性を示した。ぜひ多くの研究者に手にしてほしい一冊である。

（MIAO Jing）